

# 妙たえ の光ひかり

通刊38号 復刊13号

1994年12月20日(季刊)

角田山妙光寺 発行

新潟県西蒲原郡巻町

角田浜

〒953 TEL0256-77-2025

榊

木

タブの木と読む。境内にはあまり大きくないのが二本、うち一本は裏から玄関前への移植に失敗して元気がない。移植は難しい木と後で知った。クスノ木科の常緑高木で暖かい地に生え、樹皮は香料や染料に、材は建築、家具に利用される。主に四国、九州の海岸線に多く、そこではこの榊という苗字も多いという。

角田浜は日本海を北上する対島暖流のせいで、新潟県一温暖な所と言われる。雪も少なく、蜜柑が露地で実をつける。そのせいか、村の中にこの暖地系のタブの木の大木がとても多い。成長が比較的早く、常緑で葉も固いので、主に防風もかねて屋敷の境界に植えられている。その一方で、固い葉が四季を問わずいつもパラパラ散り、処理に困るからと切り倒されるのが近頃増えている。

実はこの木は火に大変強く、山では山火事を止め、家の火事には隣家への類焼を防ぐ役目をはたして来た。昔の人の知恵に今さらながら驚かされる。

## 岩屋の崇りたたり？

妙光寺はなぜか昔から来客の多い寺である。初めての人がさまざまな悩みを抱えて訪ねて来たり、近頃は電話による相談も多い。中には十代、二十代の若者も混じる。こうした若者に多いのが先頃までは水子供養の相談だった。それが近頃増えているのが、写真に靈らしき物が写っていると、何かの祟りに困っているとかいう話。若者に多いのは明らかにテレビ、雑誌の影響であろう。こうした写真もこれまで全て一見してそのようには見えないものばかり。どうして若者がこんなことに真剣になったり悩んだりするのか、そちらの方がかえって気がかりになっている。

先日もあった電話でのやりとり。「友達が妙光寺の裏の岩屋に行つて、暗かつたもんだからうっかりして積んである石を蹴つて崩してしまった。その後家に帰つてから、部屋にしているとテレビのスイッチが勝手に入つたり、夜中寝ているときに本のページをめくるような音が聞こえてきて気持ちが悪い。これは岩屋で石を崩した祟りだと思うが、どうしたらいいのか」とのこと。七百年前角田浜に漂着された日蓮聖人が、七頭一尾の悪大蛇を教化されたと伝えられるこの岩屋には、一方でその昔からあの世への出入口だと言い伝えがあり、死者を供養するための小石を積んだ賽の河原がある。その石を誤つて蹴り崩したために、祟りにあつていふのである。

電話での相談は、とっさに判断して答えなければならぬので大変。「うっかりして蹴り崩したというのなら心配することはない。長い人生、知らずにとかうっかりしてまちがったことをしてしまうのは山程ある。そのたびに祟りにあつていたら命がいくつあつても足りないよ。冷静になつて、テレビのスイッチのこともへんな音のことも考えてみたら」と答えた。するとくだんの若者「あ、そうですね、さすがです

ね」と感心されてしまった。

しかし管理の目が届かず、いたずらの絶えない岩屋のことを思い出して、私は「でもいいか、わざとやったのに嘘をついているとしたら問題だぞ。だとしたらすぐにローソク、線香を持って行ってお参りしてよくお詫びしてきなさい。それでも夜中のへんな音が止まらないようなら医者に行った方がいい」と少々威した。するとその若者「要は本人の気持ちの問題ということですか、わかりました！」明るく答えてくれた。

わかりが早かったのにはホツとしたが、なんだか小学生を相手に話していたかのような気持ちになって、少々がっかりした。というのも、声の感じは明らかに高校生以上と思われるに、なぜ自分できちんと考えようともしないで、崇りだなどと騒ぐのか。僧侶として困り事、悩み事にはなるべく話を聞いて、力になれるよう努めているつもりでいる。その際も自分で考える、自分で努力することのお手伝いと、専門家の紹介などの側面的援助、その上で、仏様のお力をいただくために共に祈るという形にしている。それを初めから崇りだ、障りだと言って来られると、こちらは力不足でその対応に自信はない。ただそう言うて来る人に年齢の差はないし、そういう人は困り事のたびにそう言うて来る傾向がある。

確かに住職歴二十年ともなると、不思議な経験もそこそこある。岩屋に関してだけでも、入口に暴力団がらみの別荘が建って困ったと言っていたら火災に二度も焼けて、今はサラ地となった。またすぐ上の山を分譲別荘地として開発しようとしたが、工事用重機が何度も転落して、恐がった関係者が手を引いてしまったという話もあった。こうしたことからも、聖域を守って行かねばならないといつも考えている。

しかし、仏教では崇りとか障りとかは基本的に言わない。人が人として生きて行く上でのさまざま悩み、苦しみ、それらを受け入れ、乗り越えていく智恵と勇氣を与え支えていってくれるもの。それを説いてくれるものが仏の教えとしての仏教だと思っただけ。その意味ではひとりひとりが意識して求めることから始まる。お互いに新しい年をいい年にしましょう。

# 木切り職人五十年

巻町布目

山田 勇さん(72才)

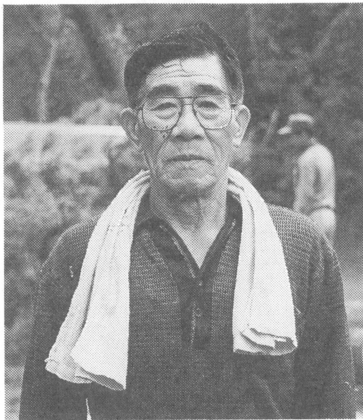
境内でも松喰い虫が猛威を奮い、予防薬注入のできない木が次々と枯れている。放置もできず、二十米はある大木を、周囲に配慮しながら切り倒す作業は、大変危険で高い技術がいる。これにかけては新潟県一とも言われるのが山田勇さん。長年扱ったチェーンソーのせいで耳が少し遠くなり、現役は引退したが、難しい作業には頼まれて現場指導に今も出かける。境内の大きな木は全て、これまですつと山田さんがまかっってきた。

独学で技術を身につけた。三、四十才の盛りの頃には、営林署の仕事、寺社の木の手入れと、請われては東北各地、はては三宅島にも足を運んだ。新潟県天然記念物の松ノ山の大樫は、周囲百米に枝を張るかという程の大木で、これを県に頼まれて枯れ枝打ちに行ったのは晩年の仕事。こうした忘れられない仕事も数多い。

常に危険と隣り合わせの仕事だけに、作業前には必ず木に酒をかけ、切り倒すときの木の往生と作業の安全を祈る。自宅では若い頃から朝晩の仏壇参りを欠かさない。「晩は寝る前にヘタながら太鼓を叩いてお参りする。そのせいかこれまで事故とは一切無縁でこれた。」と。ある神

社の大樫の枝の上で作業中、突然ノコギリの柄が抜けて後ろに倒れた。下で見ていた人達が皆大声を上げた。間一髪、幸いなことに別の枝に手がかかって命拾いした。「これも信心のおかげと思っている。若い者も何人が育てたが、ここのところがわかってもらえない」とも。

近頃はこの職につく若い人もなく、近いうちにこうした技術を持つ人がいなくなることを心配する。「でも、お寺の木は元気なうち俺がまかる」と心意気がありがたい。



## 和やかに池上、身延団参

隔年で実施している総本山身延山久遠寺への団体参拝旅行を、十月二～三日の二泊三日で行いました。これまででは必ず標高二千米の七面山への登山参拝を含め、三泊でした。しかし、近年参加者の平均年齢が若返ったこともあり、四日も留守にしにくいとの声から、七面山をお休みにしての短縮型。二年後には登山したく思います。

定員ちよūdの三十五名、トイレ付デラックスバスで早朝の出発。昼前には東京池上本門寺に到着、ここは日蓮聖人ご入滅の地。昼食をはさんでご開帳法要に各お堂の参拝、広い境内は法華経の文字数に因んで六万九千三百八十四坪あるという。

午後再びバスの人となり、一路山梨県身延山へ。早い秋の夕暮れの中、

宿坊の北之坊へ入る。

二日目五時半起床。あいにくの激しい雨の中、まだ薄暗い坂道を久遠寺本堂へ。一時間余の朝勤の後、法主様への特別のお目通り。八十六歳ながらお元気で、お若い頃から妙光寺へおいでになられた想いを語って下さった。その後貴賓室の特別見学、塔婆回向の法要、諸堂参拝、坊での朝食をはさんで日蓮聖人御廟所参拝、ロープウェイで奥之院思親閣参拝と、広大な身延のお山の一部ながら、歩き疲れる程。朝の雨も坊に戻る時には上がっており、静寂で荘厳な雰囲気も一層増して感激の面持ちでした。

昼過ぎ門前町での買い物も済ませ、昇仙峡ではトテ馬車に乗って賑やかに観光を楽しみ、甲府湯村温泉

泊。三日目長野経由で夕刻無事帰着車中で「はんばぎぬぎ」の提案がまとまり、後日これまた和やかに行われました。

来年十月、ご希望が多いので、三回目ですが佐渡の日蓮聖人霊蹟参拝の旅を計画します。檀家に限りませんので誘い合わせて参加下さい。



## 妙光寺史話

# 〈角田山御歴代控〉より(一)

妙光寺古文書の中に、「角田山御歴代控」がある。

表紙は

文化七年六月 写之寺ニ而

角田山御歴代控

二十六代 遠藤治部左衛門

この古文書から、気づいたこと感じたことのいくつかを、ご紹介してみたい。

○遠藤治部左衛門——代々妙光寺檀徒総代で現巻町五ヶ浜の遠藤家二六代の当主である。

文化七年(一一八〇)寺にて写すところがあるので、妙光寺にある歴代を記した文書、その他資料を参考

にして、まとめられたのであろう。達筆な書体であり、豊かな学識と厚い信仰心の持主と推察される。

○記録されている歴代

一世、宗祖日蓮大聖人から四十四世日義上人まで記されている。

しかし、一世〜二十四世日圓上人までと、四十一世日応上人〜四十四世の間は住職名のみで記事が殆ど記されていない。あるのは遷化(死亡のこと)された月日のみである。

文化七年は三十六世日研上人の在寺の時代であるが、住職の交替の後も記録され、四十二年間の妙光寺の移りかわりの概略も記録されている。

### 一・住職は転勤族

妙光寺創立、正和二年(一一三三)から現住職五十三世日光上人まで、今年で六八一年目となる。一住職の平均在寺は十三年と計算される。在寺の短い理由は、世襲がないことによるものであろう。在寺僅か、二年の住職から、四十二年間の長きにわたる住職もおられた。数年で他の寺院へ移られた住職の多いことに驚く。

### 二・地元、西蒲原郡出身の住職

三十一世	日饒上人	五ヶ浜遠藤家生
三十二世	日進上人	立佛仁右工門生
三十三世	日耀上人	高山 伊藤家生
四十四世	日覚上人	升湯 石田家生

### 三、日蓮宗宗学に優れた住職

「江戸時代、日蓮宗僧侶の教育は主として檀林という学問所で行われた。その数全国で二十程度あったという。中でも規模も大きく、教育施設、教授陣も立派だったのは千葉県の中村檀林で、多くの人材を輩出したことで有名であった。

地方の檀林を終えた者も遊学に來た。いわば今日の大学に相当する。檀林の主長を能化と称し、今日の大学の学長に相当する」(以上、初刊版「妙の光第三号より」)

妙光寺住職に就任しながら、中村檀林の能化ニ即ち、現在の大学の学長も勤められた住職の多いのに驚かされる。

能化となられた住職は

- ・三十五世 日寿上人
- ・三十六世 日研上人
- ・三十八世 日義上人

・三十九世 日泰上人

京都にある檀林の能化となられた住職

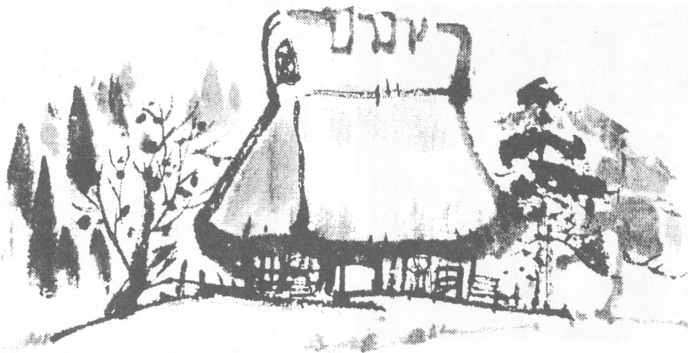
・四十世 日慶上人

京や江戸から遠く、交通不便の寒村にある角田山妙光寺へ何故、学問的に優れた住職を配したのだろうか。宗祖日蓮大聖人の御靈跡の故か、角田の地に日蓮宗の僧侶を養成するためか、あるいは、日蓮宗を東北へ布教するための拠点にするためか、宗教にうとい私には理解しがたい。

現在、妙光寺入口に建立されている古い石塔に「妙光教寺」と刻まれている。教とあるのは僧侶養成の寺院を意味するものと思われる。又客間に掲げられた額に「十律」が記されている。一部欠落して読めないところもあるが、若い修行僧の守るべき規則だっただろうと推測される。

―つづく―

(石田 誠太郎)



(7) 妙光寺教報

## 遅ればせながらのご報告

大変遅ればせながら夏のフェスティバル安穩のご報告を。合同祭祀と生前交流を目的に始まり早五回目。年々参加者が増えて、今年も百七十名の方が青森、岩手から福岡、大分まで。地元県内の当日参加者も予想を越えて、用意した資料が足りなくなっていました。

参加者数もさることながら、内容的にも「人は家族以外に老後、死後を託せるか」というテーマが反響を呼び、皆熱心に討論した二日間でした。

一日目、劇作家の清水邦夫さんが、核家族化した暮らしの中に演劇性を持たせたらと講演。石川県の老人病院長の婦長で天津栄子さんが、家族がアテにならない中で病院での取り組みを報告された。これを受け、参

加者の意見も交えたテーマ討論も活発で、最後に「人は自らが生きて来たようにしか老いることも、死を迎えることもできない」とまとめられたことが印象的でした。

夜の懇親パーティーは七十名の方が新しい角田浜産ワインで乾杯、和やかに盛り上がりました。そして二日目、六十名余りの人が大きな輪になってそれぞれ発言。二時間の間、ある方の発言に涙する人、共感の拍手をする人と、前日とはまた違った雰囲気でも感動的でした。

法要では皆さんに奉納いただいた百五十本の大ローソクに点火、太鼓、琴が加わり荘厳でした。ことに酷暑の夏で心配したのが、低気圧の接近で涼しくなり、法要中に雨を気にする程。不思議なことにこのとき、妙

光寺周辺以外では一時的にドシャ降りだったとのこと。

今回のテーマに関心が集まり、記録が欲しいという問い合わせが早くからありました。そこで本にするべく進行中で、三月には出ますので再度ご案内いたします。

前号で老人ホームのアンケートをお願いしました。整理が遅れていますが必ずご報告します。





## 住職はサラリーマン



「お寺はいいなー。お坊さんはちっとお経を読んだだけで一万円ももらえるんだから。」「えー、一万円なんか安いよ三万円くらいだよ。」「へー、すっげーなあ。」お寺の子どもをはさんでの子どもたちの会話。言われたお寺の子は黙っていたとか。ある会合で聞いた話です。子どもは正直ですね。材料も品物も持つてこなくて、お経をとるだけでお布施をいただけるのですから、「坊主丸もうけ」に見えるのも当然です。

でも妙光寺の敷地、建物は全部「宗教法人妙光寺」のもので。住職と家族は妙光寺のいわば社宅に住んでいるということや、住職がいただいてくるお布施や講演会の謝礼、行事の収入もすべて妙光寺の収入と

して扱われていることなど、案外知られていないのかもしれない。住職個人と宗教法人妙光寺は別なのです。

サラリーマンがどんなに頑張っても月給は変わらないのと同じで、住職は妙光寺から毎月一定の給与をもらっています。その月給には源泉徴収で税金が引かれます。法人としての妙光寺には一切税金がかかりませんが、住職の所得からは税金がしっかりと引かれています。

毎月の光熱費や電話代などの、住職家族と妙光寺が共同で使用しているものについては、税務上大体何割負担と決まっています。毎月妙光寺へ支払っています。そしてお寺に上がったお米、お酒や野菜まで、私たち

が頂く分は現物給与ということで、お金に換算して所得税を支払いなさい、と指導されています。

毎年負担いただいている護持会費は会計報告が出ていますからおわかりだと思えますが、誤解をまねくのはこのお布施収入のほうではないでしょうか。

お布施は住職給料という人件費と、その他の運営経費につかわれています。電気代から事務費、行事の経費、細かくは本堂の花からトイレの紙まで。大きなお寺の毎日の経費はけっこうかかります。

こんな大きなお寺の割には檀家数が少ないと言われます。ですから支えていく皆さんも大変なご苦労だとは思いますが、住職が病気等で動けなくなったら、たちまち電気代も払えなくなってしまうのです。

この続きは次回で…。

小川 なぎさ

# 行事案内

## 十二月中 お札配り

檀家の一軒一軒に来年のお札を配りながらお経に伺っています。これまで住職がひとり歩いていましたが、近頃の檀家急増、広範囲化、十二月にも法事が増えたりで回りきれなくなりました。今年は鎌田と二人で手分けをして歩いてますので、ご理解、ご協力下さい。

## 十二月三十一日 除夜の鐘

大晦日夜十時半より本堂で除夜法要。引き続き十一時四十分頃から除夜の鐘を撞きます。どなたでも先着順に一回づつ撞いてもらいます。その方には記念品と、抽選で楽しい縁起物の景品が当たります。暖かいこんにやくも出て、とても賑やかです。

毎年出足が早くなって、十一時半には並んでいないと百八以内には入れません。

同時に本堂前でお焚き上げをします。同時に、古いお札、注連等お持ち下さい。その火で焼くスルメイカは各自でご用意下さい。

毎年この時間帯に車が集中し入口付近で混雑します。臨時に投光器も用意しますが、運転者、歩行者ともにご注意下さい。

## 元旦 年始受け

元日の朝より午後にかけて年始受けをしています。檀家の方は一年の始まりを妙光寺本堂のお参りから、です。

この年に法事の当たっているお宅は祖師堂に張り出してありますので確認して下さい。

## あとがき

九月に出すべき号が今頃になって本当にすみません。言い訳の種はいっぱいありますが、きりがないのでやめておきます。

その分と言ってはなんですが、角田浜の石田誠太郎さんのご協力で増ページにしました。石田さんは長年の教員勤務を退職後、地区公民館長、人権擁護委員をお勤めのかたわら古文書読解を学ばれ、これまで手つかずだった妙光寺古文書を整理して下さいました。何度かこの話を肴に酒を一緒にするうち、妙の光に原稿をとまった次第です。興味深い話も多いので乞うご期待です。

今年もお世話になりました。どうぞ良い新年をお迎え下さい。

